

E. ヘミングウェイの死

佐藤英夫

1898年イリノイ州オークパークの医者の子に生まれたヘミングウェイは、1961年7月2日午前7時30分、アイダホ州ケッチャムの自宅で急死した。享年62才であった。当時の新聞記事、特にタイム誌には、その急死の様子が次の如くであった。

「その前夜は穏やかに機嫌良く晩食を済ませた。2階のベッドルームに入った妻メアリーは、ふとイタリー語の歌を思い出した。『私を金髪娘だと皆んなが言う』というもので、何年もの間すっかり忘れかけていた歌であった。メアリーは廊下をへだてた夫のベッドルームに入って行き、その思い出した歌の一節を口ずさんだ」。これは、恐らく夫妻でイタリーに滞在した時に覚えた歌であって、病気の夫の気晴らしにとメアリーは思ったのであろう。

ヘミングウェイは歯を磨いていたところでそのまま妻の歌に耳を傾け、磨き終ると彼自身も結びの一行をメアリーに唱和したという。翌朝7時ちょっと過ぎ、ヘミングウェイはパジャマ姿のまま階下を降りて行って、銃架から愛用の銃を取り出した。12口径2重銃身の、特別注文で作らせたものであった。

銃口を彼は自分の口にふくみ、二つの引金を引いた。一瞬にして、口、あご、頬の一部を残し、無残にも顔面が吹飛んだ。といいかにも現場に居合わせた様な記述である。しかし、中々手のこんだ細工はこの雑誌得意のお家芸かも知れない。日本国内の各報道については後述しますが、最初の暴発事故という報道は、ヘミングウェイ氏急死「銃の手入れ中に暴発」の見出しでサンバレー（米アイダホ州）2日発=A.P.、アメリカの作家、ア

ーネスト・ヘミングウェイ氏（62）は2日午前7時30分、当地に近いケッチャム溪谷の自宅で銃の手入れ中誤って暴発、死亡した。メアリー夫人が事故でかけつけた友人を通して語ったところによると「2階で寝ていたところ銃声らしい物音によって目をさまし、あわててかけ降りたところ、夫は銃架のかたわらで頭を射ぬいて即死していた。暴発らしく、メモなど¹⁾は見当たらなかった。」という。なお暴発に間違いないとみられるのでとくに検視は行われず……とか、「武器よさらば」²⁾の見出しで簡単に触れ、朝日新聞紙は同日夕刊に、「ヘミングウェイ氏事故死」UPI共同電で——ヘミングウェイ氏は高血圧のため、ミネソタ州ロチェスターのメヨー病院に入院していたが、5日前退院、ケッチャムの自宅に戻ったばかりだった。すっかり元気を取り戻したヘミングウェイ氏は2日早朝狩猟に出かけようとして猟銃の手入れをはじめた時、暴発したと言う——以下略——等を信じていたが、矢張どうも自殺らしいと考えざるを得なくなった。ヘミングウェイは長期に亘る病気で、ひどく気を腐らせていた事情もあり、血圧は高かったし、糖尿病の気味もあった。食事も飲酒もきびしく制限されており、体重も40ポンド以上も減っていたと言われている。更に冬頃ヘミングウェイ家を訪れた人々の話しでは、彼は話しぶりも何か口ごもり気味で不安定な感じを与え、自分の創作力に自信が持てなくなったばかりでなく、今迄の仕事の価値についてさえも、懐疑的な態度を見せたと言っている。

ヘミングウェイは自分の体格、体力には子供のような無邪気な自信をもっていた作家（人物）であり、外傷ならともかく、長期に亘る神経性の疾患と、余りに明らかな肉体の衰えには、やり切れないものを覚えていたに違いない。のみならず、彼のタフガイ性はかなり意志的、克己的な匂ひのするものであった。

19才の彼がイタリー戦線で夜半迫撃砲弾をあび、瀕死の重傷を負った話しは万人が周知の通りであるが、その回復後も暗闇に対する神経的な恐

怖感に執拗に悩まされたことは、彼の作品に幾度と表現されている「夜寝床について灯りを消すと途端に胸の動悸を覚え、真暗な部屋ではどうしても寝つかれない」と言って逆に灯りをつけると眼が冴えてくるばかりといった不眠の描写がいくつもの短篇に語られている。彼の勇氣は生得の向う見ずさと言うよりも、いわば逆攻勢の自衛手段に近いものではなかったのであろうかと思われる。

彼の数々の冒険には絶えず一種の敢えてする挑戦といった所がつきまわっていた。

単に逞しく剛勇な人物に、臆病者の Macomber の恐怖感や ‘The Snows of Kilimanjaro’ の死を前にした主人公の回想、幻想³⁾があれほど生々しく描けるわけがない。

冒険好きでスポーツ好きであった事は違いなかったであろうが、これはより多く彼自身の意志の力業であった。そしてその挑戦の相手、意志にとっての敵はどこよりも自分の内側に存していたに違いない。

多くの人々がヘミングウェイの即物的で、ハード・ボイルドな文体について語って来ている。なるほど情緒的な形容詞は極度に剥ぎ取られているけれども、冷静に客観的な記述的文体では決してないと思う。何かに抗って勝ち得られた獲得物であって、その際にふみこえられた抵抗が、強い緊張になって文体に与えられている。彼が海に浮かぶ冰山という比喻に托して、文体について語った事があるが、水面に表われるのは全体の8分の1に過ぎない。冰山の实质と力を形作っているのは、実は水面下の8分の7にほかならない。隠せるだけ隠せ、あるいは削れるだけ削れというのが文体を生かす所以だとヘミングウェイは語りたかったに相違ない。そしてこれが勿論、唯の文章心得ではなく、文章心得がそのまま実践的な覚悟と化しているところにヘミングウェイなる作家としての魅力があったはずである。

狩猟や釣り、又闘牛に限らず、殆んど一切のことについて彼は職人的な

ものを好んでいた。細部に精通し、熟練して、些事をもゆるがせにはしない。更には些細な部分をやりとげる事のうちに、全体の表現が達成される事を信じて疑えない。釣師は釣り具、釣り場の選び方から餌をつける順序に至るまで一つとしてやり損じてはならない。又闘牛士にどんな不意打が生じようとも、あくまで法式通りに相手の牛を殺してしまわなければならない。ヘミングウェイにとって、職人的な厳密さこそ、最とも有効で、身に合った自衛手段であったと考えざるを得なかったのである。

彼の一见、即物的で、かつカメラのように客観的な文体と言うのは、実は細心に張りめぐらされた、外界に対する、いやなかんずく、自分の内面に対する防禦網であったと言えるだろう。とすれば、ヘミングウェイの今度の死は、一つの敗北であり、裏切りではないかと反問されても無理がないかも知れない。

ヘミングウェイの父親は1928年、彼が‘A Farewell to Arms’を執筆中に自殺している。マドレーン・ヘミングウェイ・ミラー女史は「キーウエスト⁴⁾に戻って来ると、アーニーは、父の惨事についての詳しい話しをしてくれました。父は長い間自分が糖尿病と心臓病を患っていたことを、隠していたのでした。そればかりでなく、我が家の緊迫した財政問題も重なっていたという話しを聞けば、生きることに對する父の気持ちというものも少しは理解出来るように思うのでした。父は32口径のリヴォルヴァーで頭を撃ちました。——夕暮れどきになって、ふとアーニーが言いました。「多分僕も同じ道をたどるような気がする。」半分は冗談で、半分は本気でした。あり得ないことだと、わたしもその時は思っていました。

父はいつでも、自殺は卑法な人間のすることだと言っていました。けれども愛する人の行いについて、慰めとなる弁解を見つけ出すのは簡単なのだということを、わたしたちは知りました。人間はそんなことで敬愛の念を失ったりはしないものなのです⁵⁾。と書いてあり、事実この事件については彼は直接ふれた事はない様に思うが、‘For Whom the Bell Tolls’の

主人公の父親は同じ自殺者に仕立てられている。スペインの山中でゲリラ隊に加わり、決死的な任務を前にして南北戦争に参加した祖先のことを想い、その同じピストルを自殺に使った父親を卑怯者と呼んでいるのである。もしこの父親が卑怯者であるとするならば、それを承知の上で同じ道を歩む者は、父親に輪をかけた卑怯者ではないのであろうか。病気と老年に直面することを恐れて、自らの手で死を選んだヘミングウェイは、いわば敗北した脱走者と言えないだろうか。彼の言葉を借りて表現するならば、自らの戦闘能力喪失に怯えて、黙って自らを殺す戦場の兵士と言うことが出来るであろう。

思い出されるのは、アフリカで起った飛行機事故のことである。このとき彼の乗った飛行機が落ちたので、当然彼は死んだものと思われ、気の早い一新聞は彼の死亡記事まで出したほどであった。考えて見ても、この人ほど死とか、負傷とかに深いゆかりのある作家もまれなことであろう。頭がい骨を割ったことも少なくとも1度あり、脳震とうは10回あまり、しかもそのうちの数回は重大なものであった。又、ひどい自動車事故は3度、アフリカの飛行機事故の場合も、2日の間に2度も、ジャングルで墜落したのである。戦争では頭部に傷を6ヶ所、肩から下は9ヶ所に貫通銃創を受けた。18才のとき、例の北イタリアの戦線で迫撃砲にやられた際には、しばらく死んだものとしてうちすてられ、あとで医師は237発の弾丸の破片を摘出した⁶⁾という話しはあまりにも有名であった。

ヘミングウェイは自己の体験を圧縮し作品として表現した。最初の短篇集 'In Our Time' — 1925年 — は少年時代によく休暇で過ごしたミシガン州における体験を、少年主人公ニック・アダムズが試練を経て精神的に大人に成長するさまざまな事件を描いた。'Men Without Women' — 1927年 — は戦前、戦中、戦後を通じて国の内外で過ごした経験を短編にまとめたもの、その他の短編をまとめた総合版 'The Fifth Column and The First Forty-Nine Stories' — 1938年 — は闘牛、けん闘などの男の勝

負の世界を描き、人間の掟に従い、しかも死や暴力に投抗しながら、人間の勇氣と真実の姿を見つめようとしたものである。最初の小説 ‘The Sun Also Rises’ — 1926 年 — は戦争に幻滅を感じ、パリに生活する虚無的な青年男女を描いた。ついで ‘A Farewell to Arms’ — 1929 年 — はアメリカの青年従軍兵の戦争に対する幻滅を物語の筋とした。

このようにしてヘミングウェイは、多くの場面や事件を創作したけれども、その物語の本質は、少くとも彼の生涯における重要な事故⁷⁾にもとづいていたのである。

このようにヘミングウェイの作家的な生涯にとって、今度の自分の死は一つのささやかな事故にすぎない。死ぬ機会なら今までもありすぎるほどあった人である。もし自殺説を主張すれば、彼のうちで徐々に固まってきた決意や覚悟というものではなく、むしろ病院から久しぶりで自宅に帰り、寝なれたベッドで目覚めて、ひどく弱りこんだ自分を更めて意識し、その瞬間、ふとつけこんだ彼を階下の銃架に駆り立てたものは、おそらく通り魔のような死の誘惑だったのであろう。細心にはりめぐらしたヘミングウェイの自衛の網の目に、ふと生じた小さな、小さなホコロビであったのであろう。その小さな破れ目から、彼の年来のもっとも親密な敵である死がさっともぐりこんだものと解したらよいであろう。

作家としてのヘミングウェイはシャーウッド・アンダーソン、スタイン女史、スティブン・クレインに負うところが多いと言われる。

それは、アンダーソンとスタイン女史は、基本的な感情を外観的にはナイーブな慣用語で表現するプリミテビスト（原始主義者）であった。従って中西部の青少年であろうと、パリの気どった青年であろうと、ヘミングウェイは、かれらの情熱、飢え、嫌悪、恐怖、勇氣といったものをいとも単純に描いた。

一方クレインからは象徴的な表現技法を学んだ。客観的に情景を描いて感情的反応を読者に刺激する。実際の事物が作家の経験した感情を生み出

す記述、語句はできるだけ選択して暗示的であること、したがって簡潔な描写には解説がなく、形容詞はあっても極くまれなことである。ヘミングウェイの作中人物の対話は、実際の慣用語にみえて、実は高度に技巧的な芸術である。

あるいは又彼の死はこうも考えられよう。即ち、死は始めから、物を書き始めたそもそものでだしから彼の勘定には入っているということである。いわば大前提として、たえず彼の念頭から離れたことがなかった。

作者自身はこのニヒリズムの世界に耐えることができた。この世にあっては、災いは、自ら求めずとも、向こうからやってくる。丁度 'A Farewell to Arms' の語り手フレデリック・ヘンリーの場合のようにである。

彼は愛人と束の間の幸福を楽しんだあと、愛人を産褥に失い、異郷にただ1人残される。こういう言葉が許されるならば、それが人間の運命なのである。運命は避けてはならない。 'Indian Camp' にはニック少年にするどく生の意識に目覚めさせたものは、インディアン[・]の夫の自殺を目撃したことを介してである。不慮の出来事についてなら、人は覚悟を決めたり、決意を新たに固めたりする必要があるだろう。しかし常住不断、念頭にあり、計算に入っている事ならば、敵軍の砲弾であろうが、あるいはたまたま自分の愛銃の銃口であろうが、これは向うさまの骰子の目次第ということにすぎない。どちらに転ぼうと、それは時のはずみであり、偶然の事故にすぎないのである。彼は40年の文学的（作家）生涯の中で、幾度かこの落とし穴に落ちこみかけた。がいくつもの短編、等に於いても永久に、彼の死後も、もつに違いないものを定着させることに成功したのである。

このヘミングウェイ一流のストイシズムはけっきょく生と死を一つのものとして受け入れる大地に対する信頼と密接につながるものである。当時は南北戦争勃発して100年目に当たっていた。戦後アメリカ南部文学の台頭

がはなやかであるのに、北部出身のヘミングウェイの急逝は劇的であると同時に、現代文学の一段階を示すものであると言えます。

とにかく、ヘミングウェイは1899年7月21日に生まれているので、あと20日ばかりで62才の誕生日を迎えるところであった。「失われた時代」から出た作家であるから、その世代はとくに終ってしまった以上、もう用のない人間であるという考え方をする人もいるかも知れないが、彼はロスト・ジェネレーションを足がかりとして、人間の生き方をそもそもの振り出しに戻って探求した作家であると言ってよいであろう。若い時分、人間のよりどころとして教えられていた宗教や哲学を、戦争という野蛮な現実にあつて根こそぎ否定しながらも、人間がまともに生きてゆくために、どうしてもなければならぬものを自らの体験によって探ろうと務め、そしてある程度それを探り当てたものと言う事が出来る。それは生命を否定しようとする戦争や闘争や死に直面して、痛切に感じとられる生きようとする強固な意志と、そこから当然派生するきびしい戦いの精神であると言えます。ヘミングウェイ文学の価値は新しい時代のスタイルを作り出した以上に、そのあたりに真価が密められているのではないかと思う。

つまり「失われた世代」の幻滅に耐ええた彼も、肉体と精神の衰えから、最後には死の誘惑に屈せざるを得なかったのであろう。

メアリー夫人は州の検屍官と相談した上で「事故死」と発表、「猟銃の手入れ中、暴発事故を起こし、頭部銃創で死亡」と述べた。その後自宅の居間で、4人の記者のインタビューを受けた折りに、「猟銃は、夫の大好きな持ち物の一つです。手入れをしていたのではありませんが、銃を見ていたのは確かです。私だって写真をとるつもりもないのに、カメラをとり出して見ていることがありますし……、私はやはり、信じ難い形で起こった事故だと確認しています。」と語った。

しかし前後の事情からして、これが自殺であることは、まず疑う余地がない、と思われる。弟のレスターは、はっきり自殺と断定し、長男のジ

E. ヘミングウェイの死

ジョンも「義母の言い方はまずかった」とほぼ自殺を認めている。メアリーも後年の回想の中で、「意識的にウソをつくつもりはなかったが、真実に直面する勇気がなかった。」と書いている⁸⁾。

「世は去り、世は来る。地は永久に長持ちなり。日は出て日は入り、またその出し処に喘ぎゆくなり。」伝道書第1章

- 注 1) 昭和36年7月3日、読売新聞夕刊
2) 昭和36年7月3日、日経新聞夕刊
3) スクリブナーズ社、キリマンジャロの雪 18頁～21頁
4) ヘミングウェイの実妹
5) マドレーン・ヘミングウェイ・ミラー著・酒井チエ訳、新書館「少年時代のヘミングウェイ」181頁
6) 昭和36年7月4日、朝日新聞
7) 昭和36年7月4日、読売新聞
8) 佐伯彰一著、研究社「書いた・恋した・生きた」189頁